保育の中の小さなこと大切なこと ②

―S夫とあき箱―

守永英子

三歳児クラスのS夫は、保育室の隅から、何か目新しいものを見つけてくるのが好きである。

十月も半ば過ぎのある日、S夫は、あき箱をかかえて、保育室の中を、何をするともなく歩いていた。この箱は、石けんと香水がセットになってはいっていた厚紙のしっかりした箱で、ふたと身が一辺でついているものである。

S夫は、ときどき、パタパタと箱のふたをあけたりしめたりしていたが、私のそばにくると、私の顔の前で、パタッと箱のふたを閉じてみせて、「ほらっ！」と言った。パタリとしまった箱の音を聞き、突然閉じられた箱のふたと身の間から、風が私の顔にかかったその時、私には、〝ほらっ！〟という短い言葉のうしろにあるS夫の気持ちが、よく分かったように思われた。「あっ、音がした。風がきたわ」という私の驚きの反応に、S夫は、以前作った風車のことを思い出したように、「この風で、風車まわそうか」とひとりごとのように言ったが、やってみようという風でもなく、私の驚きで、充分満足したように、その場を離れて行った。

S夫の行動を理解できたと思った瞬間は、私には感動的なものであった。

S夫は私にとって、分かりやすい子どもではなかった。入園当初は、激しくはないが、衝動的な危険な行動がやや目につく子どもで、園庭でしゃがんでじゃりをいじっている子どもに石を投げたり、立っている人を突然つきとばしたりした。友だちへの関心はあっても、かかわり方がよく分からないらしく、足にからみついたりしつこくするためトラブルをおこしていた。

二学期になって、少しは落ちついてきたものの、あき箱の

ストックの中から目新しいものを見つけ出しては、それで何かを作るという風でもなく、セロテープでちょっとはりつけたり、ただ持って歩いたりする。あるいは、「……を作ろう」と言うが、自分で言ったものを作るのでもなく、また、それに対しての大人の助力も彼には不要らしく、「いいんだよ」と軽く拒否し、その結果でき上るものは、完成品なのか、途中なのか、何ができたのか、私には分からないものであった。S夫自身にも、何を自分が本当にしたいのか分かっていないのではないかという感じであった。

S夫のそのような状態に対して、私の気持ちは、〃せっかく集めておいた材料をもう少し活用してほしいけれど、材料体験の大切な時期だから、あせらずに待たねばならない〃という程の、積極的な肯定とはいえないものであった。

このような状態であったから、S夫の行動を〃なるほど〃と思えたことは、私にとっては感動であり、今まで〃材料体験の時期〃などと分かったつもりでいたことが、何と空疎なものであったかという実感であった。

私のS夫に対する気持ちが、積極的な肯定に変ったとき、S夫の行動が、私の心に見えてくるようになり、〃材料体験〃という空疎な言葉が、S夫の行動で次々と満たされてきた。

ヤクルトのびんを二つずつ輪ゴムでくくったものを、いろいろに積んでみたときも、クレラップの芯の筒をいちごのあき箱の裏に煙突のようにはりつけて耳に当てたときも、彼は説明もなく「ほらっ！」と私に示しただけであったが、私には彼の気持ちがよく分かった。

私が彼の気持ちが分かるように思えたとき、彼も私の気持ちが分かるようになったことを私は感じることができた。私がクラス全体に話をしているときに、彼は以前よりずっと落ちついて話を聞くようになったし、急いで遊具の片づけをしてほしい時も、彼はよくやってくれるようになった。いつもそうであると確信して言えるほど強固なものでないにしても、彼と私の間は、目に見えない糸で、やっとつながったという気がしている。

そして、保育のペースに欠くことのできないこの〃見えない糸〃が、消えてしまわないように、より確かなものになるように育てていくことが、次の私の課題と思っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）